

弁 殿 御 消 息

建治二年七月二日 五五歳

滝 王 家 實 罷
たきわうをば、いえふくべきよし候ひけるとて、まかるべきよし申し候へば、つかわ
衛 門 大 夫 改 心 だいしん あじゃり
し候。えもんのたいうどのゝかへせにの事は、大進の阿闍梨のふみに候らん。

一、十郎入道殿の御けさ、悦び入って候よしかたらせ給へ。

一、さぶらうざゑもんどのゝ、このほど人をつかわして候ひしが、をほせ候ひし事、
あまりにかへすがへすをぼつかなく候よし、わざと御わたりありて、きこしめして、か
違 三 郎 左 衛 門 態 聞 召 書
きつかわし候べし。又さゑもんどのにもかくと候へ。

七月廿一日

日 蓮 花 押

弁 殿

河 辺 殿
かわのべどの等の四人の事、はるかにうけ給はり候はず、おぼつかなし。かの辺にな
に事か候らん。一々にかきつかはせ。度々この人々の事はことに一大事と天をせめまい
らせ候なり。さだめて後生はさてをきぬ、今生にしるしあるべく候と存すべきよし、
ごしょう
したゝかにかたらせ給へ。伊東の八郎ざゑもん、今はしなのゝかみはげんにしにたりし
左 衛 門 信 濃 守 現 死
を、いのりいけて、念仏者等になるまじきよし明性房にをくりたりしが、かへりて念仏
活
者真言師になりて無間地獄に墮ちぬ。のと房はげんに身かたで候ひしが、世間のをそろ
能 登
しさと申し、よくと申し、日蓮をすつるのみならず、かたきとなり候ひぬ。せう房もか
敵 送
くの如し。おのおのは随分の日蓮がかたうどなり。しかるになづきをくだきていのるに、
少 輔 折
いまゝでしるしのなきは、この中に心のひるがへる人の有るとをぼへ候ぞ。をもいあわ
ぬ人をいのるは、水の上に火をたき、空にいえをつくるなり。

此の由を四人にかたらせ給ふべし。むこり国の事のあうをもってをぼしめせ、日蓮が失
とが
にはあらず。ちくご房、三位、そつ等をばいとまあらばいそぎ来たるべし、大事の法門
筑 後 帥 暇
申すべしとかたらせ給へ。十住毘婆沙等の要文を大帖にて候と、真言の表のせうそく
じゅうじゅうび ば しゃ だいじょう
の裏にさど房のかきて候と、そうじてせゝとかきつけて候ものゝ、かるきとりてたび候
総 書 付
へ。紙なくして一紙に多人の事を申すなり。